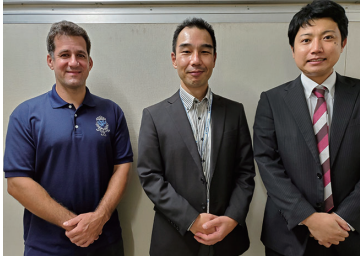




生徒の自主的な活動を 7つの学びを軸に振り返り 自己認識や自信を深める

茗溪学園中学校高校 (茨城・私立)



写真左から、IB CASコーディネーターのニクライ ゲルゲイ先生、IBDPコーディネーターの松崎秀彰先生、CASアドバイザーの清沢健二先生

生徒の自主的な活動はまさに自分ごとであり、多くのことを学んでいるはず。その学びの最大化を狙った、振り返りの取組をご紹介します。

茨

城県つくば市にある茗溪学園中学校高校は、開校以来、文化祭などの行事、部活動などの課外活動、課題研究など、「生徒が自分から動かないと何も始まらない活動」に力を入れてきた。自主的な活動を通して、挑戦する意欲や自信を育もうとしてきたからだ。学校案内のパンフレットでも「自ら学び、成長していく能力」の育成を謳っている。

その教育方針は、世界各国で評価されている総合的な教育プログラム「IB (International Baccalaureate = 国際バカロレア)」とも高い親和性があった。そこで同校は、IBにおける16歳〜19歳が対象の「ディプロマプログラム (DP)」の導入を図り、2016年に認定校となり、IBDPコースを開設した (現在、高校2、3学年に1クラスずつ)。

以降、同コースでは、生徒たちがさまざまな自主活動を「CAS」という課外活動と関連づけ、より意識的に行うようになった。簡潔に述べると、自主的な活動と併せて「そこで何を学んだか振り返り、学んだ証拠を蓄積し、他者に示していく」ことまで取り組むようになったのだ。

これから紹介するのはそのCASの実践となるが、IBを導入する予定はなくても、「生徒の自主的な活動から学び」を大事にしている学校であれば、「一連の取組を参考にさせていただく」と思われる。

背景：ねらい

振り返りは「反省会」ではない
学びの成果も実感してほしい

CASとは、Creativity (創造性)、Activity (活動)、Service (奉仕) の頭文字を取ったもので、創作活動からスポーツや社会貢献まで、幅広い活動を指す。一般の学校でいえば、部活動やボランティアなどの課外活動、行事や生徒会などの特別活動が、CASに通じる分野と言える。

同校は、生徒がこうした活動に取り組んだとき、体験したことを本人が振り返って学ぶということを、以前から重視してきた。けれども、IB導入を図る過程で「世界標準のプログラムと比べると、今までの本校の振り返りはまだ足りない部分があった」と、準備を進めてきた松崎秀彰先生たちは感じたという。

「生徒が自分たちの活動を振り返るとき、これまでは帰りの会の反省会のように、悪かったところや改善点にばかり目を向けさせていなかったか、と思っただのです。IBにおける振り返りでは、生徒が自分の良かったところや、成長できたところまで、しっかりと見つめていきます」

振り返りの手法にも違いがあった。「活動の良かった点や悪かった点を考えてみよう」と、ざっくりと振り返るのではありません。IBには「7つの学びの成果」を始めとした指針がいくつ

図1：生徒に示される「7つの学びの成果」

1. 自分の長所と成長すべき点を認識する
2. 課題に挑戦し、その過程で新しいスキルを習得している
3. 自らCASを計画し開始することができる
4. CAS活動を継続し、やり遂げる粘り強さを示す
5. 自らのスキルを活かし、また他者と共に活動する意識を認識する
6. グローバルな課題に取り組む
7. 選択と行動の倫理を認識し、考察する

※IBにはほかに「10の学習者像」「5つのATL(学習の方法)」という指針もあり、これらもCASや教科授業の振り返りに活用されている。

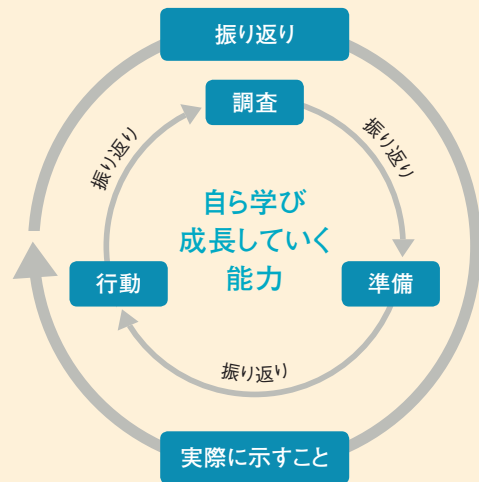
があり(※図1の注釈参照)、その枠組に沿って振り返ります。枠組があるので、活動を振り返ったとき、何ができていなかったか、生徒は具体的に考えられるわけです」

「7つの学びの成果」とは、CASの活動で「何ができるようになることを目指すのか」を明示したもので、その内容は右の図1のとおりだ。

「以前までの活動の振り返りは、それぞれの先生の職人芸に頼っていて、何をどう振り返るのかを言語化できていませんでした。そこが明確になったこと

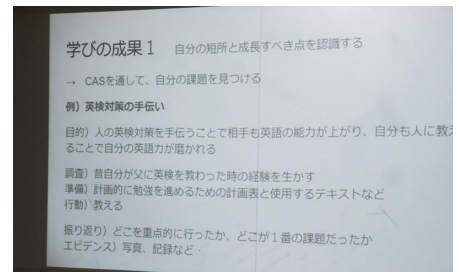
CASの5つの段階によるサイクル図

CASは2つのサイクルで進められる。一つは、内側の円のよう「調査」「準備」「行動」とその都度の「振り返り」を重ねるプロセス。もう一つは、外側の円のよう「学んだことや達成したことを「振り返り」で明確にし、他者に「実際に示すこと」で、自己認識を深め、他者の反応も喚起するプロセスだ。



出典：IBO(国際バカロレア機構)「[創造性・活動・奉仕](CAS)指導の手引き」
※上記出典の図版に、編集部が「自ら学び 成長していく能力」の言葉を加筆

CASは課外活動だが、茗溪学園中学校高校では、年に数回、HRにクラスでの振り返りもしている。班を組み、おのおの自分の活動を「7つの学びの成果」の観点から振り返り、まとめて発表するのだ。



生が見守り、コメントを返したり、HRの時間などに直接相談に乗ったりする。このときの先生と生徒のやり取りがポイントになるという。IBDPコース3年生の担任、ニクライゲルゲイ先生は、「活動の中身について、私たちがあれをやれ、これをやれ、と言うことはありませぬ」と語る。

「CASの活動は、生徒が自分で『やりたい』と思って挑戦することが大切だからです。ただ、活動記録を見ると、何をしたかの事実は記述していても、何を学べたかまで深く考えを落とし込めていないことがあります。そんなときに『なぜうまくいったと思う?』『もう1回やるなら、どうすればもっとうまくいく?』『相手の話をどう受け止めた?』などと問いかけ、さらに振り返りを促します。活動の中身を評価してコメントするのではなく、『活動したことが学びの成果につながっているか』をチェックし、曖昧ならば、生徒が自分で考えを深めていけるようにフォローするのです」

IBDPコース2年生の担任である清沢健二先生は、活動の振り返りで「生徒一人ひとりの自己認識を高める」ことも狙っているという。

「生徒の活動について『このときにどう思った?』『どんな感情を抱いた?』といったことも質問し、自分自身を見つめてもらいます。その積み重ねで『自分とはどういう人であるか』ということがわかってくると、そんな自分はこ

けでもない。基本は、おのおの生徒が、自分がやりたいと思ったCreativity, Activity, Serviceのいずれかの活動に、好きなきときに自発的に取り組む、という課外活動だ。

具体的にはどんな活動をするのか。実例を挙げると、学校のゴールポストのペンキ塗り、友人の英検対策の手伝い、といった1日の活動もあれば、コロナ禍にクラス全員で毎日続けた体幹トレーニング、といった継続的な活動もある。

また、後輩にIBのことを伝えるためのイベントの開催やWebサイトの制作、学校の寮の食堂の残飯を減らすためのプロジェクト、SDGsを知っても

実践

活動で「何をやるか」以上に
そこからの学びや成長を重視

CASはIBのコアプログラムの一つとされているが、授業が毎週あるわけでもなく、決まった学習内容があるわ



生徒インタビュー

振り返るなかで認識できた力を 社会に出てからも生かしていく

写真左から、高校2年生の根本 樹さん、青山和輝さん、甲斐文葉さん



●CASの活動で、IBの科目選択を先輩に説明する会を開きました。去年、自分が不安だったので、判断材料を増やしてあげたかったです。クラスの人にも協力してもらったのですが、自分が中心になって何かをしたのは初めてだったので、とてもいい経験になりました。振り返りながら進めることで、共に活動する力が身についたな、とか、次は時間管理をこうしたい、とか、社会に出てからも生かしていけることを、たくさん学べたと感じています。(根本さん)



●寮の食堂の残飯を減らすプロジェクトを、寮生5人で進めています。寮生の食べる量に合わせた提供量の調整、残飯のたい肥化、余った加工食品の寄付を考え、実現可能かを寮長さんや栄養士さん、市役所や子ども食堂の職員さんと話し合ってきました。今は活動の後輩への引き継ぎも目指しています。知識が足りず提案が通らなったり、会議の司会でポロポロになったりもしましたが、そうした失敗から学んだことも含めて、今後に生かしていきたいです。(青山さん)



●所属する美術部では、毎年一つのテーマで部員みんなで作品を作るのですが、その創作をCASとして進めました。今年のテーマはSDGsを知ってもらうことで、私は17の目標のうちの「貧困をなくす」ことを絵にしました。昔から絵を描くことが好きでしたが、CASの活動と振り返りで「美術には視覚的にもものを訴える力がある」とも実感できました。その力で、社会に貢献できるといいなと思っています。次は地域の身近な問題も考えてみたいです。(甲斐さん)



の先どうなりたいたのかという、進路にもつながる思いが、おのずと育ってくると考えているからです」

先生のサポートも受けて、CASの活動と振り返りを重ねた生徒たちは、最終的には卒業までに、今までの活動で「7つの学びの成果」をあげたことを、エビデンスを用意して提出する。どんな形で提出するかは生徒が自由に選ぶことができ、レポートでもいいし、写真や映像による作品や、自作のWebサイトでもいい。そうして生徒が自らの成長を証明して、初めてプログラム修了となる。

生徒の変容

自分で何かを変えられる その自信をもって実社会へ

活動を振り返り、自らの成長を他者に示すことの効果は、見守ってきた生徒たちが如実に感じている。
「CASの活動が進むほど、生徒たちは、何を思ってたんだか話をし、どういうことを学んだかを堂々と話せるようになるのです。自分の意見を言えるようになったことや、活動を通して学んだ具体的な実感があることが、彼らの自信につながっているのを感じていま

す」(ニクライ先生)

「生徒たちは活動のなかで失敗もするのですが、振り返りでそこを客観的に見つめ直し、どうしたら改善できるかを自分で考えるようになりました。『次につながる事ができる』というのが、振り返りの一番の強みだと思います。それが本人の成長につながっていますし、そのプロセスを経たことで、自己推薦書や志望理由書にも、活動内容だけでなく『克服したこと』や『学んだこと』まで書けるようになっていきます」(清沢先生)

次につながる、といっても生徒の活動のなかには、「こうしたらもっと良くなる」と振り返った時点で、在学中には同じことに再チャレンジできずに終わるものもある。しかし、それ故に「次の世代につなげたい」という思いも必然的に出てくるようです」と清沢先生は見ている。生徒たちは、下の学年のためにイベントや動画で自分たちの経験を伝える活動や、立ち上げたプロジェクトを後輩に引き継いだりする活動も、CASの一環としてどんどん始めているというのだ。

「昨年度の卒業生には、仲間と一緒にIBヘルプデスクのようなものを立ち上げ、全国の高校生の相談に乗る活動を続けている者もいます。そういう姿を見てみると、今生徒たちがしている活動は、CASの修了で終わるものではなくて、その先の人生にもつながっていくものなのだ、と思うのです。『自

分が動くことで何かを変えられる」というマインドが、生徒たちにはじわじわと浸透しているのを感じています」(松崎先生)

今後の展望

生徒同士で振り返りを 深めていくような学校に

CASの取組は学校全体にも広がっている。M・CAS(茗溪キヤス)という、IBDPコースでなくても中学3年生以上の希望者が取り組める活動が始まり、2020年度には100人近くが参加しているのだ。

今後としては、清沢先生は「生徒の振り返りの質をさらに高めたい」と思っている。生徒によって振り返りの深みにまだ差があるからだ。もっとも、CASでは、振り返りというのも、強制はせず生徒が自発的に行ってこそ意味があるとしている。だから、生徒が自ら振り返りを深めていけるよう、教員としてどうふるまえばいいかを考えていきたいという。

ニクライ先生には、その先に見すえている夢がある。

「私たちが行っている振り返りのサポートを、将来的には全部、生徒に任せたいと思っています。先輩が後輩の力になるというように。高いハードルかもしれませんが、今の生徒たちの成長を見ていると、いずれ必ずできると感じているんですよ」